



連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り 77

東京五輪の「おもてなし」

旅行作家 山口 由美

振り返るべきは、ホスピタリティーの心意気

二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピック開催が決定した。

前回の立候補の時、全く国民の支持が得られず、今さらオリンピックなんて、と冷めた反応だったのがうそのように、地球の裏側からもたらされたニュースは、多くの日本人に歓喜をもって受け止められた。

一九六四年に続き、二回目の五輪となる東京。三回開催したロンドン、二回開催したアテネ、パリ、ロサンゼルスに続き、数少ない複数回の五輪を経験する都市となる。

世界から絶賛された高円宮久子妃のスピーチから始まった最終プレゼンテーションにおいて注目を集めたキーワードが、滝川クリステルが印象的なゼスチャーとともに発した「お・も・て・な・し」だった。

東京五輪の開催決定は、アベノミクスを追い風とする日本経済の明るい話題として受け止められた。特に流行語となった感さえある「おもてなし」のキーワードは、ホスピタリティー産業に携わる人たちを浮き立たせたのではないだろうか。

一九六四年の東京五輪では、多くのホテルが開業した。六二年開業のホテルオークラ、六三年開業の東京ヒルトンホテル（キャピトル東急ホ

テルの前身）、六四年のホテルニューオータニと東京プリンスホテルなど。いわゆる「第一次ホテルブーム」である。

ホスピタリティー産業が浮き立っている背景には、あの時代の再来を期待する気持ちがあるのだろう。実際、「第一次ホテルブーム」を彩ったホテルオークラや東京プリンスホテルでは、今回の決定を受けて、建て替え計画が検討されていると聞く。

六四年の東京五輪は、まさに戦後復興からの象徴であった。今回も震災復興ということで、それと並列的に位置づける人たちもいる。しかし、東北で五輪が開催されるのならいざ知らず、東京は震災で直接的な被害を受けて一面の荒野になってしまったわけではない。経済が活況になるのは喜ばしいことであり、五輪を機に老朽化した施設を新しくすることは必要だろうが、先進国の成熟した首都となった東京でホスピタリティー産業に求められているのは、そうしたゼネコンの開発だけではないはずだ。

私にとつての六四年の東京五輪の記憶は、父からよく聞かされた「オリンピック選手村給食業務準備委員会」の話だった。

『帝国ホテル百年史』をひもとくと「オリンピック東京大会組織委員会からの要請を受けた日本ホテル協会は、昭和三十八年（一九六三年）

三月二十五日の春季総会で、『採算を度外視し、日本の食事とサービスに汚点を残さぬよう全力をあげて』選手村の給食事業に取り組みことを確認した」との記述がある。

だが、子供の私は、日本の一大イベントであった東京五輪に父が関わっていたとは、にわかには信じ難く思っていた。それが本当のことだと知って驚いたのは、ある日、わが家の本棚で見つけたオリンピック選手村用のレシピ集だった。そこには世界各国の珍しい料理が写真と共に並んでいた。

今回の東京五輪決定を受けて、奇しくもテレビのワイドショーでそのレシピ集が取り上げられていた。ある地方の料理学校に保存されていたものだという。その昔、私が本棚で見つけた、まさにそれだった。

あらためて『帝国ホテル百年史』をめくると、確かに山口祐司と父の



選手村スタッフ用に用意された『ポケット通訳』



開会式でのスナップと制服姿の父

名前がある。年配の役員職が並ぶ委員の中で、富士屋ホテル広報課という肩書の、二十九歳の父は最年少だった。祖父は、ホテルの後継者として期待して、娘婿の父を委員に送り込んだのだろう。

私は、あのレシピ集をもう一度探した。だが、見つからず、その代わりに出てきたのが、委員の制服だろうか、日の丸が付いたユニフォームに身を包み、緊張の面持ちで立つ父のスナップと選手村のスタッフ用に編集された『ポケット通訳』という小冊子である。

表紙をめくると、英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ロシア語の五カ国語会話が記されている。何とも印象的だったのは、「待つように頼む」「感謝」「お詫び」「人をほめる」などの、ホスピタリティー的な表現が充実していることだった。

例えば「待つように頼む」には「少々お待ちください」「ちょっと失礼いたします」「すぐ参りますから」「長くかかりませんから」「すぐに戻りますから」「お待ちせしてすみません」と続き、「感謝」には、「ありがとうございます」「ご親切にありがとうございます」「お助けいただきありがとうございます」「どういたしまして」「いいですとも」「どうぞ気になさらないでください」「お助けできてうれしかったです」とある。

ほんの小さな小冊子に、不要不急のこんな表現があふれている。当時は、今のように「おもてなし」なんてキーワードが声高に言われることもなかったに違いない。それでも当然のこととして、彼らは誠心誠意の「おもてなし」を実行していたのである。

今、再びの東京五輪で振り返るべきは、開業ラッシュに沸いたホテルブームのことばかりでなく、こうしたホスピタリティーの心意気なのではないだろうか。

(やまぐち ゆみ)